《正岡子規（36）の続き》その291

天涯茫々生

列伝⑦　坂本四方太（本名四方太）享年45歳

生年　一八七三（明治六・二・四）
歿年　一九一七（大正六・五・一六）
死因　不詳　肺結核？

鳥取藩士の子。鳥取中学を経て、京都の第三高等中学に入学、学制改革により、27年仙台の第二高等学校大学予科入学。29年7月卒業して、9月より東京大学文科大学国文科入学。32年7月卒業。俳句は同じく仙台に移っていた高浜虚子、河東碧梧桐に手ほどきされ、二、三句ずつ子規に送られて新聞「日本」に載った。

子規の指導を受けて、子規庵の蕪村句集の輪講にも出席するようになり、31年からは「ホトトギス」の選者にも起用された。

実生活では、文科大学助手、附属図書館兼務を命じられ、41年には助教授兼図書館司書に任ぜられた。

四方太は子規提唱の写生文に強く関心を抱き、子規庵の山会にも32年11月の第一回から出席し、多くの作品を「ホトトギス」に発表した。「夢の如し」は代表作で、幼少時の自伝性の濃い作品である。漱石も一読して、わざとらしいことのないことを褒めている。

大正元年夏頃から肋膜を病み、父の死、近火による類焼など身辺の不幸が重なり、漸時衰弱して死亡した。

子規が懊悩の果て自決しようとした日（明治34・10・13　仰臥漫録）は、看病人として呼び寄せようとして、母八重が「キテクレネギシ」と子規が書いた頼信紙を持って出た隙のことで、その相手は四方太である。やがて四方太は来て、いろいろ話しているうちに子規の気もおさまった。四方太と正岡家は親しい関係があったことが分る。

列伝⑧　森鷗外（本名林太郎）享年61歳

生年　一八六二（文久二・一・一九　新暦二・一七）
歿年　一九三二（大正一一・七・九）
死因　肺結核兼萎縮腎

津和野藩医の子息。幼にして一家で上京。年令を2歳偽って万延元年生れとして、実年齢13歳で第一大学区医学校（現東大医学部）予科に入学。14年7月卒業。陸軍に出仕して累進、陸軍々医中将、軍医總監、陸軍省医務局長となる。

あしかけ5年ドイツに留学、衛生学および軍陣医学を学んだが、その間、文学、哲学、美学、芸術につき広汎な読書に努めた。それらを基に、本務のかたわら厖大な報告、論文、小説、戯曲、史伝、翻訳の文章を発表し続け、「鷗外は一体、いつ眠るのだろう」と云われた。（全集全三十八巻）

鷗外は陸軍々医の最高位に上ったが、その在職中、脚気細菌説を採って譲らず、日清、日露戦争には戦死者を超える脚気による戦病死者を出したのは一大汚点ではあるまいか。海軍の高木兼寛が遠洋航海で脚気による死亡者が多発したことを契機に、食事をパン食に切り替えて、脚気病死者をゼロにしたのとは大違いだ。当時、陸軍では、脚気は病類別では伝染病のうちに入れられていた。

それもそのはず、師のローベルト・コッホが、世界漫遊の途次、日本に来たとき（明治41年）脚気につき意見を問うたら、同師は脚気は純然たる伝染病だと認めていたという（鷗外全集第34巻、後記）。その上、6月22日には青山胤通、北里柴三郎の臨床及び細菌学の二大家と共に、帝国ホテルにコッホを訪い、脚気研究の方針につき談話を交し、大いに力を得た心地がしたと書いている。

当時、脚気病調査会を陸軍省内に設置しようとしていた鷗外にとっては師の言は千鈞の重みがあったことであろう。世はまだ細菌学の時代で、ヴィタミン学は初歩の段階であった。

しかし陸軍でも兵食の改善についてはその前から行っていて、鷗外も「脚気減少は果して麦を以って米に代えたるに因する乎」を発表（明治34年8月17日於小倉）。〈この項続く〉